

国際センター建設

創立125周年を機に、東京農業大学国際センター（仮称・写真がイメージ図）を世田谷キャンパスに建設する。同センターは、農学分野における世界の拠点大学として、また、長年にわたり育んできた知的財産を世界に発信していく役割を担うシンボリックな建物になる。建物のコンセプトは自然・生物・国際社会・地域社会との共生。国際会議に対応した大小のホール（円卓会議ホール、多目的ホール）のほか、交流ラウンジ、国際資料室、レストラン、研究員室、校友会事務所などの施設を整備する計画。国際資料室には、協定校、海外活動史、校友会海外支部、学卒移住の歴史、国際協力への貢献などを展示する予定。



「生命科学部」の設置

農と生命を科学し、生きる、を支えるエシカル（環境保全・社会貢献など）な社会の構築をめざし進化する東京農大は、新しい学部「生命科学部」設置（来年4月、世田谷キャンパス）に向け準備を進めている。生命の本質を科学する新学部は、基盤をなす分子・遺

伝子・細胞からまるごとの微生物・動植物まで幅広い理解をベースに、それらの解析と革新的な活用法の探求に主眼を置き、「バイオサイエンス学科」「分子生命化学科」「分子微生物学科」で構成される。

また、地域環境科学部に「地域創成科学科」、国際食料情報学部「国際食農科学科」の新設も計画されている。これらの構想が実現すると世田谷キャンパスの応用生物科学部、厚木キャンパスの農学部、オホーツクキャンパスの生物産業学部と合わせ、3キャンパスでより多様な農学分野をカバーすることになる。（新学部・学科は仮称。2017年4月設置認可申請中。概要等は予定であり、変更する可能性がある）

東京農業大学 by AERA

朝日新聞出版発行の「AERA」と東京農大がコラボレーションしたムック本。高野学長ブラジル紀行「遠い異国の地を拓く 逞しき先駆者たち」、最新研究レポート「稲のことは稲にきけ」、農業実習密着ドキュメント「富士で育つ農の心」、卒業生インタビュー、東京農大今昔物語など満載。写真がふんだんに使われ東京農大の設立から現在までの125年の歴史、教育体制と研究内容、地域や社会への貢献事業、卒業生の活躍などを全116ページにわたって紹介している。



創立125周年記念式典と祝賀会

日時：5月21日（土）11時～

会場：東京農業大学世田谷キャンパス
百周年記念講堂／桜丘アリーナ

*卒業生を母校に招く第16回ホームカミングデーも同時開催

掲示板

伊藤敏朗・東京情報大教授の監督作品『カトマンズに散る花』日本で公開

ネパール映画研究の第一人者で東京情報大の伊藤敏朗教授（専門：映像表現論。東京農大OB）の監督作品『カトマンズに散る花』（2013年製作）が、ネパール大地震復興支援として日本で上映された（4月23日～5月8日、渋谷ユーロライブ）。同作品は、1960年代のカトマンズを舞台に、第二次世界大戦で日本軍と戦い、心に傷を負った男と、カトマンズの館で思索に耽る謎の女との秘められた愛の物語。原作はネパールの文豪・パリジャート女史の「シリスコフル」（シリスの花）。

ネパールは2015年4月25日、大地震に襲われ甚大な被害を被った。カトマンズの伝統建築の街並みも大き

く傷ついたが、同作品には震災前のカトマンズの美しい姿が残されている。大震災からの復興を支援する活動を通じて、日本上映の機運が高まり、震災1周年に合わせて日本公開となった。

伊藤教授がネパールで、最初に映画製作したのは2008年の『カタプタリ 風の村の伝説』。神の山から降りてきた妖精と、人間の子どもとの心の交流を描いたファンタジーで、ネパール政府国家映画賞、ネパール短編映画祭批評家賞などを受賞した。そして今、ネパール大地震で現地に派遣された日本の国際緊急援助隊の隊員と、現地ネパール人との友情の絆、被害の苦難と復興の姿を描く『カトマンズの約束』の撮影が進んでいる。同作品は来年春の公開を予定している。



公開初日舞台挨拶をする伊藤教授（中央）写真提供 遠藤湖舟氏